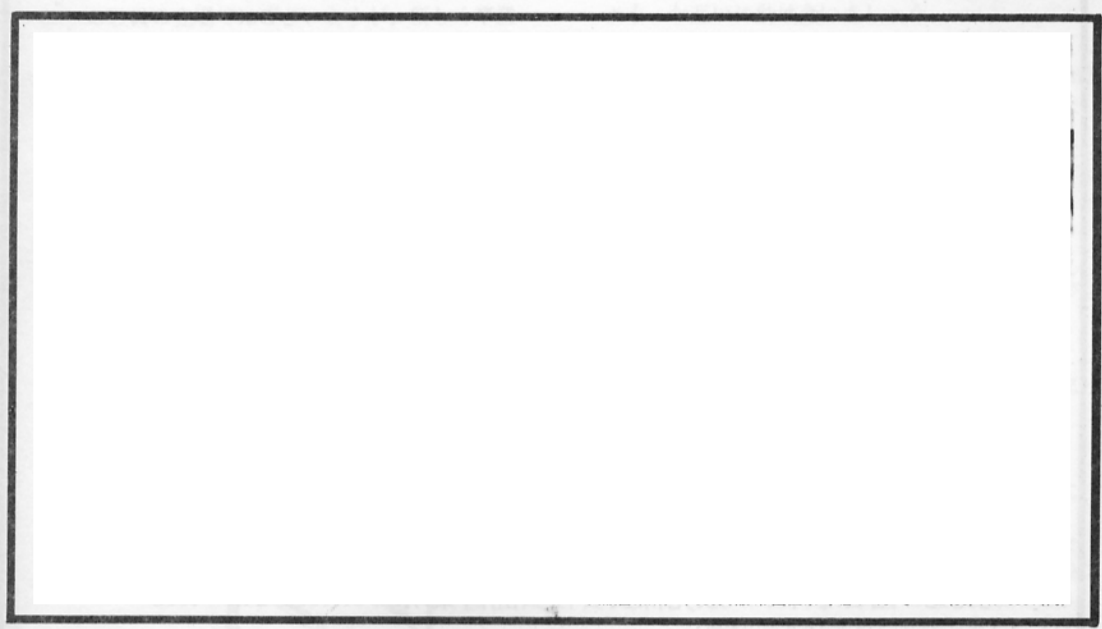


五三會

広島工業大学 建築学科 同窓会
第9号 昭和57年版



会員の皆様へ.....	菅原辰幸..... 1
五三会の皆さんへ.....	吉田亜夫..... 1
雑感.....	林公重..... 2
退任のご挨拶.....	地井昭夫..... 3
「人のふれあいに創造がある」.....	魚住順一..... 5
地井ゼミの風景.....	花岡義久..... 5
地井先生に学んだこと.....	斉木崇人..... 6
「ち」.....	近松一雄..... 7
五三会活動報告.....	手越義昭..... 8
志を新たに.....	木原多佳雄..... 9
私の生様（11年間私を支えたもの）.....	吉田正輝..... 10
今、思うこと.....	小谷真行..... 11
設計以前 ー建築のarchēとしての形の生命ー.....	河内浩志..... 12
若き良き日々.....	藤谷賢介..... 13
パパラギからの脱却.....	上木 薫..... 14



目 次 2

今、思うこと	稲垣 寿 計	15
県庁生活10年目にして思うこと	三 村 重 人	15
私は入社一年生	松 浦 通 昭	17
第7回五三会コンペ入選発表		18
第8回五三会コンペ作品募集		21
第9回総会のお知らせ		22
これからも後輩を頼みます	天 満 祥 弥	23
昭和56年度就職内定一覧表		24
五三会の皆様へ	森 保 洋 之	28
広島工業大学建築学科教員及び非常勤講師名簿		29
昭和55年度決算報告・昭和56年度予算		30
役員の変遷		31
広島工業大学の動き		32
編集後記		34



会員の皆様へ

「五三会」会長

菅原辰幸
(44年卒)

会員の皆様、お元気でしょうか。

皆様が、各分野で大いに活躍されていることと推察いたしております。

母校、「広島工業大学建築学科」にあつては、今春で14期目の卒業生が、送り出されるもので、「五三会」においては会員が三千人へと近づくわけです。

本会の役員の方々に、このような多数の同窓生全員の「五三会」であらんことを目指し、どのような活動を行なうべきか等、議論を重ね日々努力していただいているものです。

会が結成され9年を過ぎようとしている現在、「五三会」も一つの節目の時期にさしかかっていると考えられます。たく育てるために全会員の智恵を結集する必要があり、各位より意見をいたしたきたく希望いたします。

話は変わりますが、皆様方の御活躍は同窓生、あるいは先生方を通じ、また職場から、各方面から私どもの耳に入るのでありますが、「五三会」の会長といたしましても、工大の教員といたしましても心強く感じている次第です。

皆様方の活躍が、工業大学の歴史を着実に創り上げてくださっているわけです。

母校の教員の立場ではございますが、新しく卒業してゆく後輩達の就職のお世話も、何卒よろしくお願いいたします。

なお、今年度の「五三会」総会は4月29日です。多数の会員の出席を期待いたしております。

同僚さそい合わせの上、御出席下さい。



五三会の皆さんへ

広島工業大学学長

吉田 亜夫

建築の先生のお話では、既に二千人余りの会員の皆さんが、それぞれの職場で活躍されている由、老練な前川先生をついだ学長として、喜んでます。

今年度の就職状況もまずまず、又過日は、恒例の三宅駅伝に自発的に参加した五百人のランナーが、試練、鍛練を目ざして、元気にスタートしていくのを見て、先生方と協力して、この様な良い伝統を築いてくれた先輩の皆さんの努力に感謝すると共に、今後、工大の内容を更に立派にしてゆくことに、皆さんのためにも大いに責任を感じる次第です。

さて、私も永く会社に居て、新入社員から幹部までの多くの人の成長を見守ってきましたので、皆さんの一人一人が、それぞれの家庭、職場の環境、年数に応じて人生を努力し、迷い悩んでおられる様が目に見えてくるような気がします。然し、結局は多くの人々が互いに励まし合い、困難を乗り越えて、社会における自分の地歩、人の為の使命を見出し、それぞれの人生を築いています。

私もこの年になっても恩師、同窓の先後輩に物言わぬうちに、励まされているのです。

どうか皆さん、工大に良い伝統を残されたように皆さん個人、五三会、また職場にも良い伝統を残すよう、お互いに助け合ひましょう。

どうぞ何かあったら、遠慮なしに連絡し合ひましょう。私もそのサークルに含めて載くことを、お願いします。

略 歴

- 大正4年11月19日生(満65才)横浜市出身
- 学 歴 昭和12年 陸軍士官学校卒業
昭和14年 大阪大学理学部卒業
- 職 歴 陸軍多摩研究所所員としてレーダーの研究に従事し終戦に至る。
昭和21年 松下電器産業株式会社入社
昭和29年 松下電子工業研究所長
昭和33年 松下通信工業株式会社取締役研究部長
昭和46年 松下技研株式会社専務取締役
昭和54年 松下電器産業株式会社定年退職
以後56年2月まで、松下電子工業及び通信工業顧問
- 業 績 昭和29年に「受信管静特性計算法」の研究により大阪大学から工学博士の学位を受け、松下グループの各社において、主として通信機器関係の研究並びに研究指導に従事する、その間、昭和36年には発明協会より発明賞を受ける。





雑 感

広島工業大学 建築学科主任教授

「五三会」顧問 林 公 重

私は、広島工業大学に就任して以来、約8年になります。

広島大学工学部に在籍中は、土木工学科に在籍し、本学では建築学科に在籍しています。

私の専門は、土質工学、基礎工学ですが、測量学材料工学も担当しています。

従って学科内には、林は建築出身ではない……云々と陰口を叩く教員もいますが、そんな暇の多い教員は学力、創造力もなく、一編の論文さえも満足に書けぬ輩で、自己弁護にすぎません。まともな教員は、ひたすら教育、研究に専念し、立派な学者になるべく日夜努力研鑽しています。

くだらぬことは、これくらいにして建築学科の現況並びに将来の展望などについて、少し書いてみましょう。

現在の教員陣容は教授1名、助教授7名、講師6名、助手1名、技術員1名の計16名です。そのうち博士の学位を持つ教員は6名で、その意味では広島工業大学内で一番です。他の教員も一日も早く肩を並べて頂きたいと思っています。

大学、特に私立大学の教員は、教育主体でもなく、研究主体であっても困ります。即ち教育、研究共に平行して実践されなくてはならないのではないかと思います。

大学では、研究の裏付けのない教育は、空虚な説法、徒花にすぎないと思います。

研究の所算は、先づ、学位であることを思えば、教育特に私立大学の教育を担当しながら、博士の学位を取得することは、可成り難かしいことのように

思われます。

従って博士号を持たない人は、講師以上の教員には採用しないつもりでいます。

広島工業大学も、学校の将来性を考えれば、近い将来、大学院（修士課程）を設置せざるを得なくなると考えています。その時、直ちに対応できる状態にしておく必要もあり、非常に難かしい問題ではありますが、ここまでできたのですから、何とか頑張ってみようと思っています。

堅苦しいことばかり書き並べましたが、卒業生の皆さんが「己の母校は」と自慢できる学科にしてみたいと思っています。これは、私一人の力では当底及ばないので、総長、学長を初め、他大学の教授などの絶大な御協力を頂きたいと考えています。

工学は、産学協同でなければ成り立ちません。将来、益々この傾向は強まるものと思います。実際現場で困っておられる問題があれば、「ドシドシ」学校に持ち込んでください。お互いに勉強、研究しましょう。

日本の将来のために、

自分自身のために、

順次、皆さんの期待に答え得る人々を採用して広島工業大学の発展の一翼を担って行きたいと思っています。

五三会の皆さんの絶大な御後援を、お願いして筆を置きます。

皆さん 元気で頑張ってください、

返りの巻

別冊 昭和工大 30年 巻末



な安堵感を与えてくれるものです。しかし、その割には工大内部で、このことがあまり認識されていないように見られるのは、大変残念な事です。

しかし、30年という大きな節目までは、まだだいぶ遠いのですから、今後とも皆さんの粘り強いご活躍と工大の発展を期待して筆を置きます。

私の書斎



地井先生に学んだこと

筑波大学 齊木 崇人 (46年卒)

我、恩師、地井昭夫先生の御栄転を、お祝い申し上げます。

私は、広島工大へ赴任された、初講義の日から、地井先生のもとで学びました。さらにその後、助手として残り、東大へ出るまでの5年間は、私のその後の生き方を決定する重要な蓄積の時期だったと思います。

その5年間に学んだ体験的蓄積は、東京大学大学院、筑波大学と場を変えながらも、さらには茨城、東北、パラオ、ネパール等、地域密着型の仕事を展開する中で、常に主軸となってきました。それらは今、起承転開型の動きとして、私の中で躍動しています。

先生の意に反し、広島の地を出た私は、不遜の弟子であったと思いますが、逆にその教えが広島の地を出るきっかけになったと思います。

私が仲間と学んだことで、その後、血肉になったことに、フィールドワークがあります。

貧欲なまでの好奇心と、人間に対する愛着、直観力を漁村集落の調査をとおして学んだのです。

野島に始まり、走島、牛島、日本海沿岸、島根半島、隠岐島群島、瀬戸内海諸島と、先生と歩いた漁村集落は、150 以上になると思います。そのころの先生との生活時間は、1年間の3分の2以上だったと思います。明けても暮れても地井先生、地井先生でした。

これは、私の友人をして齊木は、しゃべり方、歩き方まで先生に似てきていると、言わせしめました。

学問のみならず、生活を総体として学んだのです。

この13年間、地井研究室に学んだ学生は、150人以上になると思います。不遜の弟子である私を含め、この弟子達が、より成長、成熟することこそ、広島の地に多くの種を蒔いてくれた地井先生への恩返しと思っています。

集落研究をとおして、生活、空間、人間、そして環境を科学として教わり、さらなる活力と併せ、なやみと課題を与えていただいた地井先生と、常に我々を暖く迎えていただいた奥様に、深く感謝します。

そして、新たな文化の地、金沢での御活躍を祈り次の漢文を送らせていただきます。

一年而居成聚

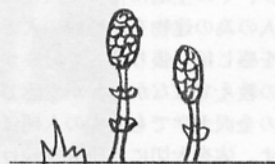
二年成邑

三年成都

—史記 五帝本紀より—

最後に、広島という地が、地井先生を失うことは大きな損失と思い、我広島という風土が、蓄積・熟成させる人間的文化的性を、持っていないのではないかという、独善的自己批判にて筆を置きます。

1982年1月5日 筑波にて —



「ち」

(有) 近松建築設計事務所 設計主任
近松 一雄 (48年卒)

広島で、約13年間過ごされた先生が、今度、金沢大学へ行かれると聞いて、さびしさを感じている。

先生との出会いは、確か2年の大学際、建築学科展で、奥さんと息子さんの童夢君と一緒に、展示会場へ来られた時であろうと思える。その後、4年の時(この時期は、僕自身建築をプランすることに興味が薄らいでいた。)ゼミに入り、私の人生の転期になったと思う。

地井ゼミでは、いろんな漁村、山村に行った。見た、感じた、考えた。……悩んだ。地井先生の底の深さ、広さ、多くの概念を学んだ。それは決して机の上だけではない。地井先生の元に4年間、それは私のその後の人生を変えたと言っても、過言ではない。それはゼミに入って来た仲間全員の意見であろう。これらの先生の教えの中で、私の心の中に人生を“生きる”ための戦術としての銘言が2つある。

一つは、卒業設計ガイダンスの時、社会に貢献する方法として、

「①身体を使う ②頭を使う ③金を使う の3つがある。体力に自信があり、農山漁村に興味のある人は、私のゼミに来なさい。」でした。

もう一つは、

「20代は何でもよい、自分なりの課題をつくれ、30代は、その課題をこなせ」でした。

その教えの通り20代は点的に、又、30代は直線的になるよう、最大限に努力と決断でやっけて行こうと思っています。

最後に、先生が広島を去られることは、本当に残念だと思いますが、先生の“ち” [みち=み (接頭

語、尊敬の念を表わす神の所)+ ち (道の意) = 往来、道徳、途中、方法、教え、道のり、専門、あゆみ、里程] が、そうさせたのだと思い、先生の増々の御活躍を祈って筆を置きたいと思います。



私の生様（十一年間私を支えたもの）

松村組 広島支店勤務

吉田正輝（46年卒）

私は、工大を卒業して、民間の建設業に就職しました。はや11年が来ようとしています、私のような者が卒業生の中でも、一番多いパターンかと思えます。幸いに一つの会社で何とか続いています、卒業時の私の就職の際の、気持は「3年ぐらい現場をやって、その上で設計事務所に移ろう」と思っていました。それで、卒業当時は深く考えることなく今の会社へ就職しました。

私の今の仕事は、いわゆる俗にいう“現場監督”です。設計事務所とか官公庁に、たずさわっておられる方のように、建物を自分の意志のもとに計画して、法的にもクリアーした建物を、という様な計画時での喜びとか、苦勞とかいうものは味わえることはできません。そのかわり計画後の建物を何もない所に図面のまま、安全と工夫とをもって形造っていくという、何というか、創造の喜びとか苦勞とかを味わえる訳で、今ではその魅力のとりことなり、3年位で退めるつもりも今や10年目を迎えようとしている次第です。私の仕事は、会社が全国ネットの為あちこち点々と渡り歩かねばなりません。私も広島支店のため、中国五県管内を8ヶ月から2年位の工期で点々としました。

今では、中国五県どこへ行っても大体、自分が手がけた建物があります。何年か先に他の物件でその地へ行ってみると、自分の手がけたものがそびえ立っているというのは、うれしいものです。ついつい足をのばして、そっと見に行く訳であります。工期工期で点々と移り歩いて雨の日も、風の日も雪の日も、外での仕事は、仲々厳しいものがあります。特

に山陰での冬の仕事は、なおさらです。工期に制約され、又最近では建物公害とか言われて、近隣とか第三者の問題もいつも我々、現場にたずさわる者に降ってきます。それでも何とか建物を造るという事にしがみついて生きていこうとするのは、そこに人と人とのつながりがあるからです。そびえ立つ建物を見ていると、あの人この人、苦勞を共にした人の顔が浮んで来ます。

私の一番良かったも思っていることは、人との出会いが他のどんな職業よりも多いことです。色々な人との出会いが心の支えです。つらい仕事を終えた後の各職人の方の笑顔を見ていると、人知れずうれしくなります。皆な本気でこの建物を造りあげようと頑張っています。何も言わなくても気持ちが通い合うのです。そんな職方が色々といれ変わり、たち変わりして建物は出来あがります。一大ドラマだと言われるビル建設は、まさにその通りで骨のある仕事だと思えます。

企業は人なり といつて何事も事を起こし、動かすのは人です。その人との出会いに生きがいを感じこの10年、一つ一つ大事に育ててきました。これが私の仕事の中での唯一の支えです。今後も変わりないと思っています。私と同じように民間企業の中で頑張っておられる方の中には、私と同じ気持の方も多々あると思います。経済不況とか、色々苦勞多い建設業の中でも人と人は変わりません。

明るく元気に、これからも頑張りたいと思えます。



今、思うこと

奥村組 広島支店勤務

小谷真行 (47年卒)

皆さん、元気ですか。私も三宅の森、工大を巣立って、この4月には満10年生となります。そして工大を望む五日市町に住みついて14年。3人の坊主の父親、そのせいか頭部の方は、アテランスが早期に必要となりそうです。

私は、学生時代から、本当に建築でめしを食っていくのかな、畑ちがいではないのかと、よく考えたものです。設計は苦手、学問は苦手。とりえは、よくしゃべって、よく酒を飲む、この2点だけだった。

入社試験面接の席上で「私は店頭で物を売ったり、何かのセールスが一番自分に合っているようです」面接官の笑いを買う。が次の瞬間「我々はそういう人材を欲している。ぜひ入社なさい」てな調子で、幸か不幸か奥村組入社となり、今は現場担当者として、寝てもさめても工程、安全と仕事から解放される暇もないという状況です。皆様方それぞれの立場で頑張っておられる事と思います。

私は、今では自信を持っています。そして人並みに仕事をやっておるといふ、うぬぼれすらあります。

新入生で現場に出るなり、各職方と相撲をとったり、しゃべりまくったりで現場所長をあわてさせたものです。そのせいか2年目には、何もわからないまま1人で現場を持ちました。(当時は建築ブームで人員不足のため)各職方に仕事を習い、工程を教えてもらいながらの工事でした。そしてできた建物は、施主の方には誠に申し訳ないものでした。雨漏りには特に泣きました。

こんな楽天家の私が、神経性胃炎にもなりました。しかし、それはいい薬となり、仕事に対するきび

しさを、そしてやりがいを感じるようになったと思います。そして今思うことは、我々みんなが各立場でエキスパートそしてリーダーになっていただきたい。

それこそが工大パワーのエネルギー源と思います。

そして各人が余裕をもって五三会に出席しあってタテ、ヨコのつながりを大事にする組織にしていきたいと思います。

それもこれも体あってのもの、皆さん、健康に留意して頑張ってください。



設計以前—建築の archē としての形(eidos)の生命—

京都大学 大学院

河内浩志 (52年卒)

京都に住まうと、自然に古社寺を訪れる機会にも恵まれ、アトリエでの設計活動の合間をぬって、奈良方面まで足を運ぶこともある。品格のある美しい建築との出会い。その斗供組から庭の樹草に至るまでの寸法関係が、生きた全体的な響きとして心の中まで浸透し、その在るがままの姿に魅せられてしまうことも少なくない。

古典の建築を観照することは、理論を越えたある種の靈気との直接の交信なのである。この靈気は、専門分化した建築諸学のその以前から存在し、正しく生身の体で感得するしかない。それと同時に、これらを創造した工匠達の制作の秘密にも関心は、向かう。それは、古典主義建築としての思想でもなければ、マニエラ（手法）でもなく、ただ存在的な靈気存在論的実相への関心としてである。そこにおいては、古建築を対象的意識として眺めるだけでなく、対象を持たないが、場に生きて意識の志向性自体を主題化する潜んだ非定立的意識との両義を生きることに於いて、『汲めども尽きぬ、意味の十全な広がり』（サルトル）が現成する。

この場合、見えざる形が、見える形の自己否定として、無意味な虚無を開くことはない。建築的ニヒリズムは介在しないのである。しかしながら、モダンムーブメント以来、特にポストモダニズムの建築家は、この虚無から出発しようとしている。その虚無は有限のなかに無限を求めようとする迷いからの覚醒として、人間が落ち込んでいる逆倒の陥穽から脱け出ようとする努力を意味しているが、その虚無に立脚する限り逆倒は、本当に脱脚できない。

『虚無は、虚無自身から脱脚できない。— 虚無を飛躍した立場— 真実な無限が現われてはじめて、有限は無限へ否定されることを免れる。（西谷啓二）この無限は、虚無を克服して、有限な建築や人間を図として成り立たせている。それは背後に隠れていて、意識として対象化し得ないが、形あるものを根源的に支えており、生きることに於いてしか、くみ取り得ないものとして存在するあの靈気に相応している。違大な建築との出会いにおいて感得する靈気は、この無限の自覚に他ならない。この時古建築にきざみつけられた形（eidos）の生命は、生き生きと、おのずから展開する。

建築の archē（始源）を尋ねての古社寺の巡礼は制作におけるアポリアを設計することに向けて、超出させ得るであろう。

『 遇ひ難くして今遇ふことを得たり。聞き難くして己に聞くことを得たり。』（教行信証）



若き良き日々

大和ハウス工業(株)勤務

藤谷 賢介 (49年卒)

目を閉じて、「フッ」とため息をつく、一昔前の自分に帰る。入学してすぐに、小さなクラブの門をたたいた事から始まったことである。そのクラブは、グリークラブという男性合唱団であった。

私自身、体調がすぐれなかったので、大学生活をしながら体の調子を良くするために、何かをやらうと考えたのが主な動機でした。同じ大学生活を送るなら、自分なりに納得のいく大学生活を送りたいと思ったからであった。とはいうものの半年の間、新入生は私一人という状態で、入部したことに疑問が生じかけたころ、S君が入部してきました。

やはり、同期生というものは何となく勇気を与えてくれるものである。このころから、クラブの念願である演奏会を開催することについての議題が、部会でも活発になって来ました。それと同時に、何となく伸び悩みの時期でもありました。

それから一年半がたち、そろそろ自分達で演奏会を持つということになり、なりました。それと、学校の行事・新入生オリエンテーションセミナーの学歌指導等に、参加するようになりました。やはり、部員のチームワークの必要なことが多くなったのと、クラブ単位で行動することが、出来るようになったことでした。それと、部員全員のコミュニケーションの機会を多くとるようにしました。それにも増して役員同志、夜遅くまで下宿先で、議論を戦わせた事もありました。やはり、どういうふうを考えているかを知り、又、知ってもらうためには、一番良い方法ではないかと思えます。

そうこうしているうちに、部員の間にも自意識が

芽生えてきて、部員同志のつながりも強くなって来たように思えました。

そして、三年目の梅雨のころ、どうしても演奏会を開こうということになりました。この決定には、上級生の多大な熱意と努力に動かされて、全員一致で決まりました。やはり、ここ一番ということに、上級生は「さすが」ということであった。それからスケジュールを、こなして行くのがやっとでした。

岩国の国民宿舎、半月庵での合宿、工大山荘での合宿、江田島青年の家での合宿と、苦しかったけれども充実した日々でした。思えば、みんなで一つの目標に向って、一生懸命突き進んでいった日々、製図をサボって演奏会の広告集めに走りまわった日々。

そんな毎日が、走馬灯の様に頭の中を駆け巡って来ました。

そして第一回目の演奏会。待ちに待った演奏会。

期待と不安で胸が、はち切れそうだった演奏会。感激で何を唱い、何を話したか覚えてない演奏会。「アッ」という間に終わってしまった演奏会。我に帰って何と大それたことをしてしまったのかという回顧の念にかられてしまった。しかし二十数名で、グリークラブの一ページを創り上げたという満足感。やれば出来るという自信。結果はどうであれ、これで良いのではないか。やはり一つの目標に向って若いエネルギーをぶつけること。それが青春ではないかと私は思います。一般に言われているように、二度とない青春を自分なりに悔いのない学生生活を送れたと思っています。一つの節目として、今でもアンコール曲の「はたらの光」が聞こえてくるように。

パパラギからの脱却

広島県土木建築事務所

上 木 薫 (51年卒)

サモアに“パパラギ”という言葉がある。パパラギとは、白人、見知らぬ人のことであるが、直訳すれば、「天を破って現われた人」という意味だそうである。その昔、帆船に乗った宣教師が、ヨーロッパ人として初めて、サモアにやって来た。サモア人は、遠くからその白い帆船を見て、空にあいた穴だと思い、ヨーロッパ人はその穴を通して、やって来るのだと信じたのである。「白人は、天を破って現われた……。」

サモアを初め、南太平洋の島々では、このパパラギという言葉は、ヨーロッパ人（白人）と同意義語で使われ、同時に「文明人」という意味もあるという。そして島の人々が、パパラギを口にするとき、往々にして軽蔑と反発の意が込められているという。

ところで、私たちの生活形態は、欧米を中心とした所謂「文明諸国」の文化に多分に色着けられている。これは、これらの文化を支える文明社会そのものを是とする考え方が、前提にあるからで、ファッションや音楽に限らず、ことは生活全般に及んでいる。そして毎日の生活は、マスコミによる世界各地の情報に一喜一憂しながら、パリやロンドン、ニューヨークを隣の街のように見てとれるのである。

何と進んだ(?)生活形態であろう!「先進国」は、一方で「発展途上国」に対し、技術援助だけでなく、こうした文化そのものをも援助(?)している。悪く言えば、押し売りである。

以上の事と似たことが国内でも見られる。中央と地方の関係である。中央=東京は、全て先進地である、という考え方である。それは又、都会と農山漁

村という関係に置き替えても、成り立つように思える。全てに東京型、都会型の文化が押しつけられてくるのである。

多量の資源消費に支えられている現代の文明社会は、例えばにぎやかな商店街のファサードのように華やかではあるが、一步裏にまわれれば、それは精一ぱいの虚勢の姿でしかない。この裏側の生活が現実なら、それが生活というものの真骨頂であると思う。

サモア人が、パパラギという言葉に「文明人」という意味と軽蔑的な意味とを含ませたのは、まさに文明の押しつけに対する反抗だと受けとめられる。

彼らにとって「文明社会」は、全くなじめないどころか、彼らの生き方を変えさせ、彼らの平和な社会を壊してしまうものであり、そうした「文明」を持ち込む「文明人」に対する強烈な主張であると思う。

さて、私たちはサモアの人々には、何と呼ばれるだろう。



今、思うこと…

株共立ハウジング勤務
稲垣 寿計 (52年卒)

早くも大学を卒業して、5年になろうとしているが、毎日毎日が仕事の連続で、これと言って何一つ心に残るものがない。与えられた仕事と、自分出来る精一ぱいの仕事をしているだけの様な気がする。

それに比べ、学生時代はクラブ活動・バイト・旅行、etcと現在では考えることもできない程、時間も有り、束縛されることもなかったように思う。

勉強は、しなかったが、友人と朝まで語りあかしたり、建築雑誌を読んで、目新しい建物があればいつとはなしに見に行ったりした。又、前期後期試験の後の休みを利用し、アルバイトをしては、旅行もした。

その中で得たものは、数多くの“友”であり真の“協調性”であった。

現在の少ない時間の中においても、学生時代に得たものを大切にしたいと思う。

友人の一人一人が、各々の職場でがんばっている今日、何かの機会に会うことがあれば、学生時代と変わらなく語りあいたいものである。



県庁生活十年目にして思うこと

岡山県庁 住宅課
三村 重人 (47年卒)

五三会の皆さん、お元気でしょうか。我が工大、建築学科の同窓生も2,500名を数え、日本全国それぞれの職場でご活躍のことと思います。

私も、早いもので県庁生活十年になります。「あーあ、十年経ったなあ……。」と思っていた矢先に、原稿の依頼があり、一度は断ったのですが、丁度私も、雑誌「岡山建築士」の編集に携わっていて、原稿を集めるのに苦勞をしておりますので、十年を振り返るつもりで引き受けました。

47年4月1日付で、岡山県土木部用地課に勤務を命ずる。との辞令を受け、用地とはなんぞや、何をするぞや、と思いました。建築職として採用されたのですから、建築〇〇課とか、住宅〇〇課とか、「建」とか「住」とかの付く課に採用されるものとはばかり思っていたものですから、タイプミスではないかとさえ思えたものです。辞令を持って用地課へ挨拶に行き上司の説明を聞き、間違いでないことを知り、二度驚きました。

用地課の建築屋の仕事は、公共事業に伴う支障家屋の移転料の算定だったのです。岡山県全域を、三人の建築屋で受け持つのです。当事は、県下に11ヶ所の土木事務所と、中国自動車道建設事務所が有り事務所からの派遣依頼を受けて、一週間のうち2日か3日現地に行き、残りの3日4日で事務処理をする、という生活でした。万博景気と田中内閣の日本列島改造論の最中でしたので、公共事業は予算が本省から、いくらかでも割り当てられていた時期です。

予算を消化するためには、家屋の移転をすれば、比較的スムーズに行くのです。3人ですから、昼は

勿論、夜も残業です。残業に続く残業です。建築学科を卒業したのだから、建物を造る仕事を当然する。と思込んでいましたから、古いうす汚れた家の小屋裏や、床下にもぐりこむ生活は、たまらなくいやでした。そうこうしている時に、曾根田先生が、同窓会誌に「石の上にも3年、どんなつまらないと思える仕事でも、一生懸命に頑張れ、そしてそれを自分のものにしておけば、いつかは役に立つ、役に立たせる」と書かれたのです。先生も言われるのだし仕方がない、県庁生活を40年近く送るのであれば、3年間ぐらいは頑張って、自分か用地課に在籍した証しを残してやろう、という気持ちになりました。

そこで、日々、気になっていた家屋評価標準書の歩掛りと内容を、時代に合うものに修正と補足をしてやろうと思い、約1年半をかけて原案を作りました。

原案が決裁になり、来年度からは事務的に少しは余裕が出来ると思えた途端、人事移動です。

今度は建のつく建築課です。やっと設計が出来る、建物が創れると喜こんだのですが、都市計画法の建築許可と開発審査会事務局が、担当です。都市計画法により、市街化と調整区域に線引することは、個人の権利、乱権に制限を加えることですから、県民からは大変に風当たりの強い職場です。一例を言いますと「自分が、自分の土地に、自分の金で、自分の家を建てて何が悪い。後から勝手に法律を決めてから……。」とまあこんな調子です。現在は、線引に対する考え方が理解されているようですから、事務処理がスムーズになっているようですが、当時は大変でした。それと許可という言葉の裏返しは違反です。

基礎工事に着手した程度で発見されれば良いのですが、建物が完成して住人が、引越してくるとやっかいになります。行政処分として、使用禁止命令を出します。建物を創り、住んでもらう事を使命とする建築屋が引越して来たばかりの喜色満面の善意の第三者に、使用禁止命令を出すのです。処分を受けた側からは、今度は行政審査請求・不服申立がなされます。それがなされると、テープレコーダーを聞き

取り議事録を作成するのです。夜、遅くまで図面を書くのなら分りますが、まず技術屋なら、ひもつくことのない行政不服審査法を読むことが幾度かありました。こんなことばかりやるのなら、もう県庁を……。まだ待て、石の上にも……。将来に向けて何か一つぐらいは役に立つだろう……。またまた悪い病気です。しかし良くしたもので今度も3年で移動です。待ちに待った設計業務です。営繕係に配置替えです。天にも登る気持でした。

しかし、あれ程やりたかった設計業務についても言葉が分らないのです。材料名が、構法が、その他全てが日本語に聞えないのです。耳からは聞えても頭の中に像として結ばないのです。図面を描こうにも、方法が分らず、材料を調べるにも材料の名前も種類も分らず、ましてや建材店の名前、住所も分らず、まるで夢の中で鬼に追われて一生懸命に逃げようとしても、だんだんと差が無くなるあの状態です。

こんなはずでは無かったのに、あれ程望んだ設計業務だったのに、悔みさと惜しさの連続でした。でもここで頑張らねば、頑張らねばと言いついて、気がついたら、もう3年が過ぎようとしていたのです。少しは分りかけて来て設計が少しばかり、ほんの少しばかり自分のものになって来たと思えたらもう3年です。悪い予感がしましたが的中です。私は3年のサイクルがありますので、移動はしたくない、と希望は出していたのですが、住宅課にまたもや配置替えです。

現在、その住宅課で本省に対する予算対策と、岡山県では、最初の試みであるタウンハウス形式の県営住宅の設計に関わっていますが、十年目も全く何も理解が出来ずに終わろうとしています。

用地課の3年間は、出先事務所で懸命に働く多くの知人を得ました。人は住居に、土地に言い知れぬ愛着を持つと言うことを肌で感じました。都市計画法に携わった3年間は、住民の生の声、人それぞれの考え方、建築単体の大切なことは勿論、真の都市計画が、いかに現代の社会生活の上で必要であるかを

私は入社一年生

知りました。営繕業務の3年間は、設計することの苦しさ、楽しさ、竣工した時の言いようのない気持ちを、本当に瞬間的でしたが教えてくれたと思います。

現在の住宅課は、今から何を教えてくれるのでしょうか……。ただ言えることは、自分に素直で忠実に、であることetc。これらが無いと何も教えてもらえないことは確実なようです。

以上が私にとっての十年間でした。皆さんの十年は、どんなだったでしょう。

今後の十年、二十年、三十年を大切にしようではありませんか。それぞれの道で一。

錦 建設株式会社

松浦通昭(56年卒)

私は入社一年生。入社当時は、首に紐締めて本社で毎日図面書き。ああでもなければ、こうでもない、油汗かいて、頭かいて、どうにかこうにか絵にしてみても、先輩一言「それ、落書き？」。

春が終れば梅雨の季節、初めて現場につかされる。

竣工前の応援で、朝から晩まで外郊整地、雨でびしょり、身と心。現場員とは、かくなるものかと不安と疲れが入りみだれ、それでも竣工してみれば為体の知れない満足感。

秋風が立つと、二つめの現場に配属されて、これから本当の勉強だなと勇んでみたが、見る事、聞く事、知らない事ばかり、職人達とも話が通じず、青くなったり赤くなったり。不安と焦りは日に日に募り、私に現場は向いてないのではないかと、先に立ため後悔のはぞを、後に立てて唾んでいるうちに、日々がすぎ、はたばたと慌しい毎日。どこから湧いてくるのか、次々と職人達にせかされて、ようやくなじんだ安全靴で、足場の階段駆けのぼる。

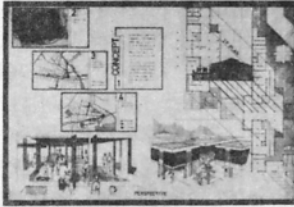
生まれて初めて作ったあかぎれ。膏葉はって、いたわれば、「大丈夫かい？」と母が問う。心配ないさと笑ってみせて、心の中は泣きたい気持。

ああ、この仕事が自分の選んだ道かと思ってみても、誰もが通るつらい道。自分できめたこの道を自分のものとするために、次に出てくる真の道をのり越える為に、精進を重ねて行こうと、思っている今日このごろです。



入 選 作 品

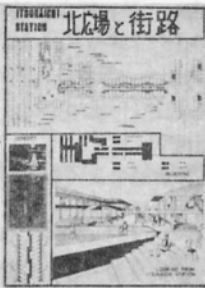
▶ 入 選 作 品 ◀ 「THE CENTRAL ITSUKAICHI」
吉尾友夫 ・ 畝本祐司 ・ 坂田紀子



審査員感想

1. 形態的に“ヘルツベルガー”にこだわりすぎたのでは……。
2. 建物のデザインが未熟。全体の配置計画はよい。
3. 交通機関など、全体的地域の中でとらえているところはよい。
4. 3作品の中では、広場として最も実現性が高く、ショッピング・スペースの配置もかなり考えてある。

▶ 佳 作 作 品 ◀ 「北広場と街路」
伊藤貞二 ・ 下岡秀樹

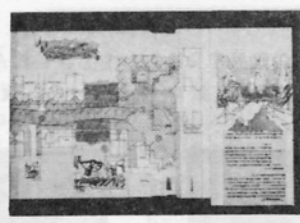
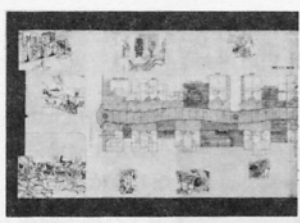


審査員感想

1. 屋根の形が、どうもいただけない。
2. 全体の配置計画は良い。各建物のデザインと表現が良い。
3. 階段などの段差が高いのは、駅前広場という人の集まる場所では、危険が高いのではないかと、身障者のことも考えているだろうか。
4. 歩行者空間と交通処理が、うまく両立するようよく考えてあります。が、しかし、核としての広場や、ショッピングセンターのとらえ方が、今一つ弱いように思えます。

▶ 佳作作品 ◀

「さざめき通り」
鷹村暢子 ・ 小島修一郎

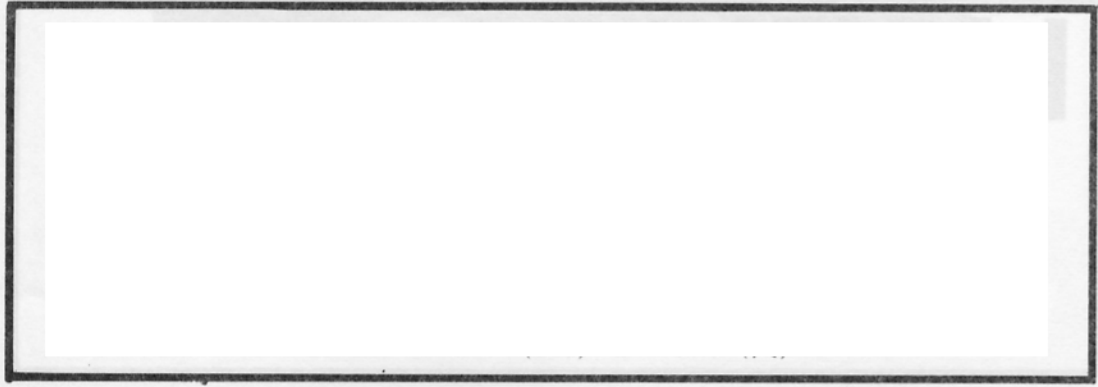


審査員感想

1. 大量交通（バス・広電 etc）についての配慮がない。
2. 全体の配置計画は良い。
3. スケッチの風景が、その情景をよくあらわしている。なんとなく歩けるとい感じが良い。
4. 交通処理の点で、現実的可能性があるかどうかを別にすれば、各所に工夫も見られ最も楽しい作品であり表現も豊かで夢があると思う。

出品作品全体の感想

1. 3点出品で、甲乙はつき難いが、駅前の街区として駅舎との関わり合い、又、駅舎に対する配慮が少なかったように思う。その中で、入選作品だけは、その点、幾分配慮がなされていたように思う。
2. 全体に五日市町の空間構造、交通形態などに関する検討が弱かったと思う。図面は、各々工夫されている。
3. 中心が不在である。イメージとコンセプトの構成が不明確である。
五日市駅の意味と町内交通についての考えが、表現がたりない。
4. サービスヤード、サービスルート等、サービス関係の（裏方的）配慮がほしい。駅前の大きさ、バース数、店舗等の施設数と、規模形状などの設定根拠が、不明確であり示すとよい。
5. 全体的には、駅前再開発では、日常的観点でのショッピングと楽しみのそれと、また、その延長としては、文化的施設も考えられる。即ち、それらのヒエラルキーと、その配置計画の重要さと、それらを支え上げるパーキングスペースと、人の動線の構造的差異と、その配置等、計画においても訴えないといけないものと、それらを、ひとまとめとしたの顔としての情緒的空間表情の仕分け構成等の押えが、不充分だったと思う。
6. 現実的な問題としては、土地の高度利用による地権者の各種権利の吸収、つまり、商店、事務所、住宅等の共存した形（高層化）を考える事が必要で、又広場でのバス等の交通処理は、欠くことができない重要な部分だと思う。





これからも後輩を頼みます

広島工業大学 助教授 天満 祥 弥

五三会員の皆さん。“お元気ですか”今年はこの挨拶で通すことにしています。建築学科では、新館2棟が竣工、新カリキュラムも間もなく3年目に入り、大いに発展しています。

さて、小生5年振りに就職委員として多忙の一年を送りました。その近況を報告し、併せて先輩の指導により、よい就職をお願いします。

建設業界は、例年になく不況で、求人は少ないのではと考え、積極的に企業研究を進めたこと。又先輩達を訪問して、生の話を拝聴させたこと。—お世話になりました— 縁故を大いに利用。積極的な求人企業に対しては、なるべく学生を送ったこと。

OBのいる優良企業は、できるだけ応募させたこと。

建築設備系企業や建築材料の企業にも学生を啓蒙し、多くの内定者を得ている。

求人は、私の判断でまとめた数値では、建設系152社、住宅関連45社、設備34社、材料54社、設計事務所26社、その他71社、計382社で、求人数として約640人、この他に公務員応募があります。卒業予定者は241人です。倍率は他の科に比して一番少ないのです。これに対して、内定内訳は建設系約46%、住宅13%、設備8%、材料5%、設計事務所10%、残りは公務員他です。最近の就職対策の特徴としては、10月からの会社訪問、11月からの受験に対して俗にいう青田刈りの戒めです。然し従来の方法と特に異なる点は、学生が応募する以前に、その企業を研究訪問し、企業の関係者と会って十分調査の上、受験する方向に変わっています。両者にとって大いに有効な方法であります。

求人案内の紙上調査のみでなく、事前に見合い？をし、確かめています。

紙面少なくなりました。

諸君の健斗を祈ります。





五三会の皆様へ

広島工業大学 助教授

新任教官 森保洋之

昨年1月1日付にて本大学、建築学科にまいりましたモリヤス ヒロシであります。五三会の皆様へ御挨拶する機会をいただき、有難く存じております。—略歴について—

栃木に生れ育ち、大学時代から広島にまいりますまで、東京、渋谷に住んでおりました。

千葉工業大学建築学科卒業後、東京工業大学社会工学科に籍をおいたのち、東京工業大学建築学科の助手として約12年間、研究・教育（含、大学院指導）をいたしてまいりました。また、宇都宮大学建築工学科の講師も併任いたしてまいりました。その後、本大学にまいった次第です。

—専門分野について—

建築学のなかの建築計画が、専門であります。中でも、住宅計画、集合住宅計画、公共施設計画住宅地計画、都市計画など住生活環境の整備計画が主たる領域であります。このうち“住宅の集合性に関する研究”は、殊に専門とさせていただいておりこの研究により、学位（工学博士）を東京工業大学よりいただいております。

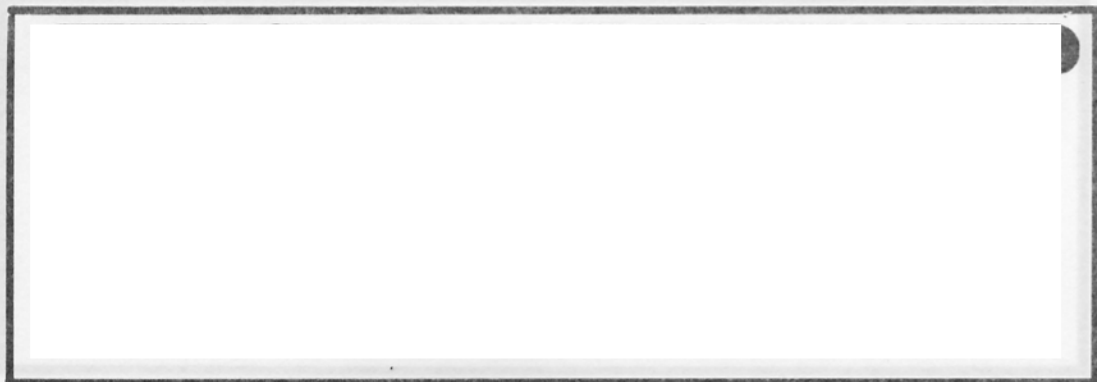
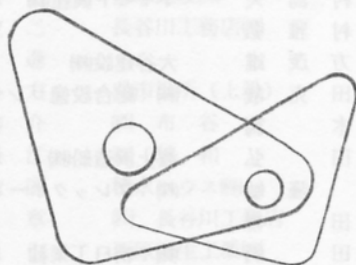
「人は空間（環境）をつくる。空間（環境）は人をつくる。」という生活と空間の関わりあい（相互規定・因果関係）の視点より、人間生活環境づくりの条件を探究することに、私の研究的興味があります。（これらに関する論文、著書の発表のほか、設計、計画もいたしてまいりました。）

—抱負などについて—

教育面では、学生諸君に「計画する心」を理解していただくよう「考えるヒント」を与えられるよう

努力したいと考えております。また、学年内のヨコの系、学年相互のタテの系についての“同窓の士としてのコミュニケーションの形成”も大切なことと考えております。

皆様、どうぞよろしく願い申し上げます。



〔昭和55年度 決算報告〕

▶ 収入の部

繰越金	386,303
新会員会費	576,000
会員会費	339,500
〔 会員会費 214,500 会費振込分 125,000 〕	
広告料	1,420,000
雑収入	124,763
	<hr/>
	2,846,566

▶ 支出の部

印刷費(会誌・封筒)	1,130,000
郵送費	466,750
会議費	118,990
活動費	11,000
総会負担金	15,447
在学生援助費	36,970
コンペ費	201,140
バイト費	0
消耗品及び雑費	22,730
繰越金	843,539
	<hr/>
	2,846,566

〔昭和56年度 予算報告〕

収入の部		支出の部	
繰越金	843,539	印刷費(会報・封筒)	400,000
新会員会費	390,000	郵送費	480,000
会員会費	300,000	会議費	180,000
広告料	1,000,000	活動費	70,000
雑収入	1	総会負担金	100,000
		在学生援助費	60,000
		コンペ費	220,000
		バイト費	50,000
		消耗品及び雑費	50,000
		予備費	923,540
計	<hr/> 2,533,540	計	<hr/> 2,533,540

▶ 広島工業大学の動き

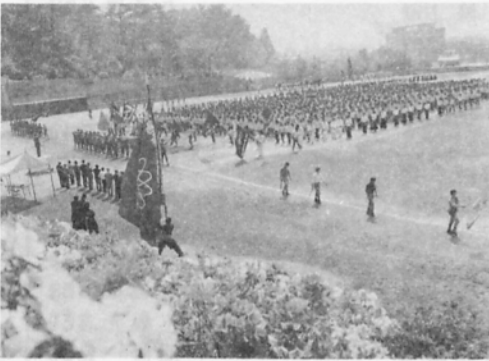
(本館と並木道)



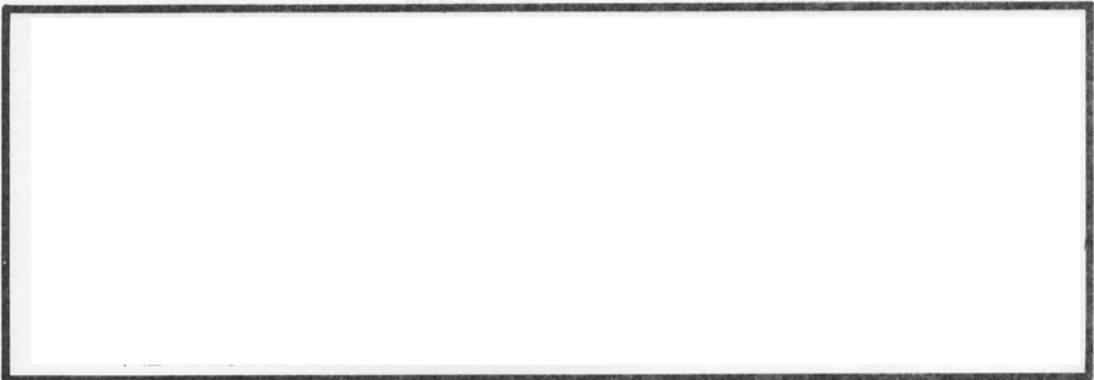
(試験)



(体育祭)

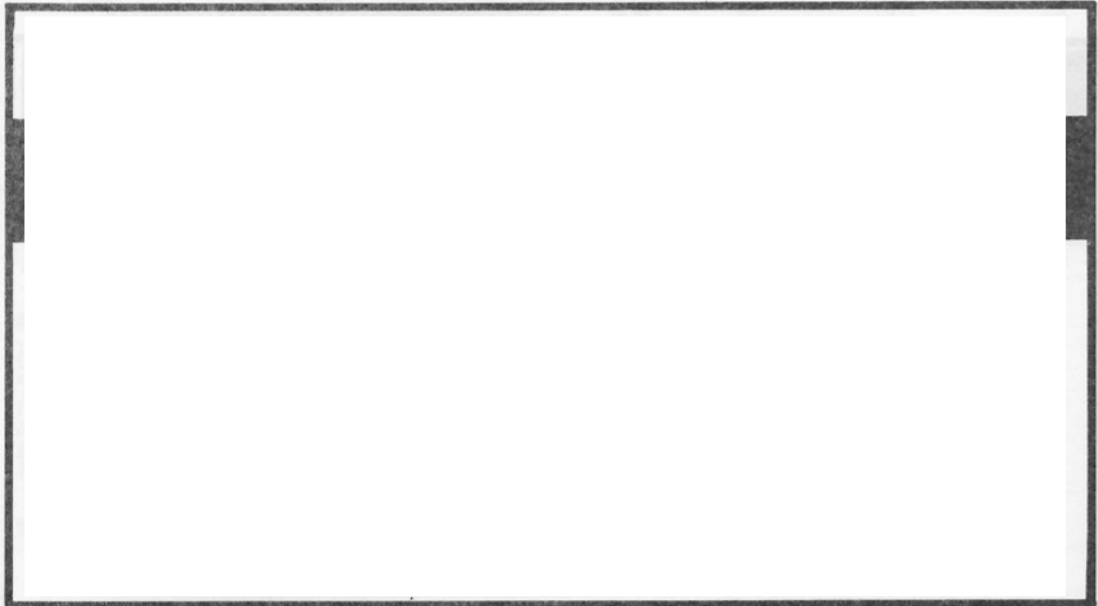
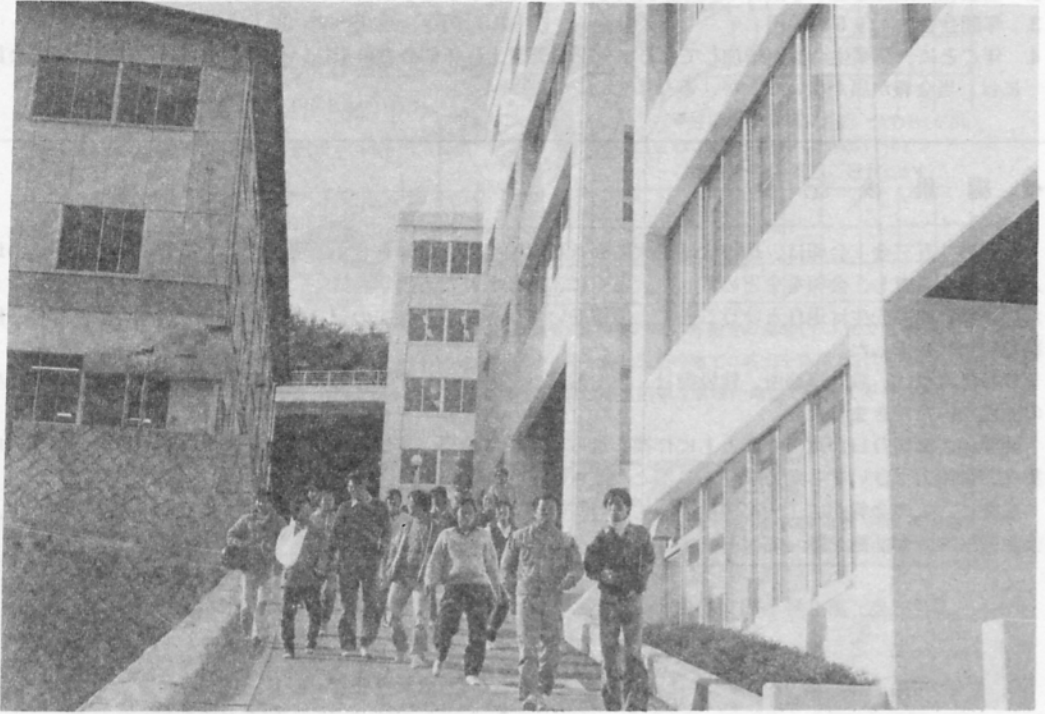


(工大祭)



HC-Top Pile

(建筑学科研究棟)



◀ 会費納入のおねがい ▶

1. 五三会は、建築学科卒業生の年間会費、入会金で運営されております。会費を納入されていない方は、1日も早く送金下さるよう、お願いします。
2. 当会報に添付している振替用紙を、使用していただきますと手数料が、かかりません。
3. 年間会費 1,500 円 入会金 1,500 円
4. 年ごとに、卒業生会員が増加しており、五三会運営上、年間会費の未払いの会員ならびに住所不明の会員には、当会報が届かないことが、あります。

◀ 編集後記 ▶

今回の「五三会」会報は、母校広島工大の動きを卒業生に、お知らせするとともに、卒業生同志の連絡の場となるよう考慮し、会報をまとめました。とくに、新任された吉田学長先生、森保先生の原稿をいただきました。また、地井先生は退任ということで、原稿をいただき、地井先生のゼミの卒業生からも思い出として、原稿をいただきました。

OBよりは、設計事務所、建設会社、住宅産業、そして官公庁等あらゆる分野で活躍されている、卒業生の原稿をいただきました。

編集は、締切り日が近づくとともに作業が進み、多忙な仕事（本業）の合間に、スポンサー集め、情報の収集など御協力下さいました方々、ありがとうございました。

最後に、この会報が広島大卒業生の間をより一層強く結びつけるものとなり得ますよう期待するとともに、会員皆さんの御活躍を願っております。

「五三会」第9号 編集委員

上 之 博 文

保 井 英 三

青 木 成 夫

伏 谷 通

広島工業大学建築学科同窓会会誌

「五三会」第9号

編集責任者 上 之 博 文

発行責任者 菅 原 辰 幸

印刷所 平 本 印 刷

発 行 昭 和 57 年 3 月 10 日



広島工業大学 建築学科 同窓会